

炎天下46チームが熱戦

決勝は「0-0」PK戦の死闘に

U-20日本代表監督、大熊清さん(元FC東京監督)の協力を得て、

商学部・早川宏子ゼミ主催のフットサル大会「オオクマカップ'05」が立川市・昭和記念公園で開催された。

昨年第一回の「ハヤカワカップ'04」に冠がついて、名実ともにレベルアップ、

6月11、12の両日、46チーム358人が参加して手に汗にぎる熱戦をくりひろげた。

木村暁人(早川ゼミ・商学部3年)

さながら「フットサルの祭典」

第2回大会は、①スポーツを通じて八王子市・多摩市の学生及び地域住民との交流、②FC東京を八王子地区で盛り上げる——をテーマに、

私たち商学部・早川ゼミの3年生10人が約5カ月間をかけて準備した。

昨年、ゼミの先輩たちの努力で初めて実現した「ハヤカワカップ'04」をより発展させ、さらに盛り上げていこうという思いはもとよりである。

大熊監督の名のついた冠大会になったのと合わせ、男子部門だけでなく、今回新たにミックス(男女混合)部門を加えた。さらにフットサルコート

だけでなく、「うんどう広場」

も使いサブイベントとして「スピードガン・コンテスト」なども。主催側としては「フットサルの祭典」と形容したいような盛り上がりとなった。

決戦・「おむらいズ」vs

「ゆかいな生物」

決勝戦にのぞむ選手たちが入場する。そして、両チームの写真撮影。

そんなセレモニーまでやった。日本代表戦のように——。両チームとも持ち合わせがないので、ペナントの交換はなかったけれど。

都内の大学生、社会人が幅広く参加した2日間にわたる大会。好ゲーム、

また激戦つづきのなかで最後に勝ち

残った決勝チームは、中大附属高校出身者を中心とした「おむらいズ」

vs 中大生でつくる「ゆかいな生物」。

「ビー」という審判のホイッスルで、7分ハーフ前半の試合が始まった。フットサルは、両チーム5人、計10人の選手が、ハンドボールほどのグラウンドでめまぐるしい動きをみせる。サッカーと違い、一度交代した

選手も出入り自由だ。

さすがに決勝まで勝ち進んできたチーム同士である。巧みなボールさばき、絶妙なパス、矢のようなシュート。実力伯仲の、じつにハイレベルな試合展開となった。なかでも試

合を盛り上げたのは、互いのゴール

キーパーの気迫あふれるプレーだった。「絶対入れさせない」。壁のように立ちほだかり、絶体絶命のピンチを何本も防いだ。そのたびに観客のどよめきがわいた。そして、前半が終了しても、スコアは0対0。一般にサッカーよりも点数は入りがちなのだから、いかに緊迫した好試合だったかをこのスコアが物語るだろう。

独・カーンもかくやの……

選手はむろん、審判も観客も引きこまれる、マレにみる熱戦。会場全体に一体感がわきあがった。私たちは前後半通しても決着がつかなかった場合はPK戦による決着を想定していたのだが、変更せざるをえなかった。周り人たちのもつと試合を見た。どの声に応えたのである。

——延長戦に入った。それでも価値あるゴールキーパーの好セーブが光る、凄まじい攻防がつづいた。延長前後半を戦い尽くして、結果はおも0対0のドローだ。

いよいよPK戦に移った。両チームのゴールキーパーが、土壇場、どんな好セーブを見せてくれるのか。



守るも攻めるも…手に汗にぎる
決勝戦＝昭和記念公園

みんながカタズをのんで見守った。PK戦・3本勝負は、先攻「おむらいズ」、後攻「ゆかいな生物」。両チーム1本目をともに決めた。高まる緊迫感。「おむー」が2本目も決めたあと、「ゆかいー」の2番手……。シュートのスピード、コースは決して悪くなかったが、「おむー」のゴールキーパー・小林元宏君が好セーブ、3本目も防いだ。わきあがる歓声。結果3対1で「おむらいズ」が十分に戦いを制して優勝、46チームの頂点に立った。

試合終了後の表彰式。拍手のなか

で、MVPは、独の守護神、オリバー・カインもかくやの働きをした「おむらいズ」の小林君。だれもが認める受賞である。

ミックスでもヒロイン誕生

初の試みとなったミックスの試合では「S・J・今月」と「山中ロバーツ・S・J」の2チームが決勝に進出。優勝した「S・J・今月」の、とくに吉田ミホさんはシュートを決めるなど大活躍した。吉田さんはMIX・MVP賞を受賞し、さらにサブイベントで開催したスピードガンコンテストでは74キロを記録して女性部門第1位と、1人で3冠。小林君がヒーローなら、「オオクマカップ'05」のヒロイン、という活躍ぶりだった。女性もフットサルに参加し、男性と共にプレーを楽しむ。女性がゴールを決めると、見ている人たちからもチーム自身も一段と盛り上がった。今大会でミックスの試合を開催したのは大成功であった。もう一つの試みであったうんどう広場を使ったサブイベントでは、「スピードガンコンテスト」と「ストライカーキング」を行った。スピードガンコンテスト



まどろむ選手たち。充実の汗。

子地区で盛り上げる」と掲げたように、プログラムとスタッフのTシャツを赤と青のFC東京カラーに統一。2日間で参加者は、選手・応援の観客ら約700人にものぼった。

他にも、地元スポンサーからは1800本近くの飲みものを提供していただいた。おかげで飲み放題の大サービス。炎天下、熱中症などのトラブルがなかったのもなによりだった。

では長谷公人君が脅威の118キロのシュートを蹴りこみ、観衆の度肝を抜いた。

大熊監督、FC東京の協力得て

スピードガンなどの機器は、大熊監督を通じてFC東京からお借りしたのである。「大会をもっと大きくしたい」「価値のある魅力的な大会にしたい」という思いから、大熊監督に猛アピールをかけて大会名も「オオクマカップ'05」になったのだ。企画目的の一つに「FC東京を八王

園のフットサルコートと同「うんどう広場」を借りる手続き面では課題も残った。プログラム作成についても構成やスポンサー広告のページ、そしてカラー印刷にすることによる印刷費の問題などの難題も。ゼミの後輩たちがこれらを克服しながら「オオクマカップ」を引き継いでさらに充実した大会にしてほしいと思う。

お世話になった関係者のみなさまに早川ゼミ生として厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。